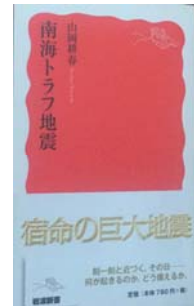


南海トラフ地震

表題は山岡耕春・名古屋大学教授による岩波新書の新刊である。表紙カバー裏から一南海トラフ地震。それは、日本列島の宿命ともいえる地震だ。マグニチュード 8~9 クラス。今後 30 年以内の発生確率が約 70 パーセント。日本の経済と社会の中枢を直撃するこの巨大地震は、ひとたび起これば未曾有の大災害をもたらす可能性がある。いつ来るのか。何が起きるのか。どう備えるのか。第一人者が語る。



マグニチュードや震度の説明から始まり、繰り返す南海トラフ地震と予想される被害、震災対策などが各種データから示される。終章を「将来発生する現象は過去に知られている現象の範囲内とは限らず、もっと大きな規模の現象かもしれない。私たちは、日本列島の自然が引き起こす、ごく稀ではあるが大規模な災害と災害との間の、平和な時期に生かされてきたのかも知れない。このことを理解して、日本列島で生きていきたい」と締めくくる。一点だけ紹介しておきたい。

南海トラフの巨大地震で懸念されるのが海拔ゼロメートル地帯の地震災害である。これは過去に経験のないタイプの地震災害である。わが国の地震防災は、発生した地震災害を減らす対策が取られてきた。1923 年の関東大震災では 10 万人以上の犠牲者のうち 9 割が大規模な火災による犠牲者であった。1995 年の阪神・淡路大震災では、6500 人近い犠牲者のほとんどが家屋の倒壊や家具の転倒による犠牲者であった。2011 年の東北地方太平洋沖地震では 2 万人近い死者・行方不明者の大部分が津波による犠牲者であった。わが国では、過去に痛い目に遭った災害を減らすように努力がなされてきている。しかし、過去に経験のないタイプの災害は見過ごされがちである。それが、海拔ゼロメートル地帯の災害である。南海トラフの巨大地震の影響を受けるのは、濃尾平野の海拔ゼロメートル地帯である。この地域を守っている堤防が揺れにより破壊されると、すぐに浸水が始まる。

濃尾平野は伊勢湾の奥にあり、津波が伝わってくるまでには地震発生から 1 時間以上かかる。そのため、仮に堤防を越える高さの津波がやってくるにしても、避難するためには十分な時間があると思ってしまう。しかし、そうではない。地震の強い揺れによって堤防が壊れた場合には、地震発生後すぐに浸水が始まる。堤防の破壊は、揺れによって堤防の直下の地盤が液状化し、地盤が堤防の重さに耐えられなくなって堤防が沈んでしまうために発生する。ゼロメートル地帯は連続する堤防によって地域が守られている。そのため一カ所でも堤防が破れるとそこから水が侵入し、地域全体が水没する。

(2016 年 3 月 27 日)